
書評：Ásta. (2018). *Categories We Live By: The construction of sex, gender, race, & other social categories*. Oxford University Press.¹杉本 光衣²

私たちは複数の社会的カテゴリーに属しながら生活している。女性、日本人、学生、東京都民など、所属しているカテゴリーを数え上げるのは困難なほどである。このような社会的カテゴリーは私たちの自己理解を助け、所属感をもたらす一方で、私たちを抑圧する役割も果たしている。社会的カテゴリーがあることによって可能になること (enablements) も制限されること (constraints) もあるのだ。

本書でアスタは、私たちが生きている社会的カテゴリーとはどのようなものか、と問いかけている。社会的カテゴリーはどのようにして作られ維持されているのだろうか。また、どのようにして私たちの相互作用と自己理解を形作っているのだろうか。

アスタはこの複雑な問いに対して、社会的カテゴリーを定義する性質や特徴についての形而上学的アプローチを試み、「授与主義的枠組み (conferralist framework)」を提唱する。授与主義的枠組みによれば、人々を「分類し位置づけるという授与的行動により、個人の行為者が、社会的カテゴリーを創造し維持している」(p. 127) のである。

授与主義的枠組みの詳細な検討に入る前に、本書における社会的カテゴリーの意味について確認しておきたい。アスタによると、社会的カテゴリーとは社会的な性質もしくは特徴によって定義されるカテゴリーのことである。たとえば、大統領 (*president*) や著名人 (*famous*) のような社会的なカテゴリーは、大統領であること (*being a president*) や著名であること (*being a famous*) のような社会的性質によって定義される。他方で、自然的カテゴリーは、自然的性質によって定義される。例えば、赤い髪であることは自然的性質であるため、赤

1 アイスランドでは姓ではなく父称を使用していることから、2017年以降のÁstaは名前のみを使用している。以前の出版物では“Ásta Kristjana Sveinsdóttir”と表記されている。

2 東京大学大学院総合文化研究科 Email : mi.sugimoto23@gmail.com

い髪は自然的カテゴリーとなる。

本書は六章からなっており、大別すると、第一章はアスタが提唱する授与主義的枠組みの説明、第二章は授与主義的枠組みから導き出される新しい社会構成主義の提唱、第三章・第四章が生物学的性（sex）とジェンダーを中心とした授与主義的枠組みの応用、第五章がその他の社会的カテゴリーに対する授与主義的枠組みの応用、第六章がアイデンティティに関する問題となっている。本稿では授与主義的枠組みの説明において特に重要だと思われる第一章と第二章の要約を行い、その上でコメントを付していくこととする。

なお、英語表記は原文の表記に従っている。

第一章

第一章では本書の中心的なアイデアである授与主義的枠組みが提唱される。

まずは、社会的カテゴリーを定義する社会的性質について考察がなされる。私たちはどのようにして社会的性質を獲得し維持するのか。この問いに対して、授与主義は「特定の文脈において、他の人の態度や実践によって授与される」（p. 33）と主張する。

性質が他の人から授与されるとは、具体的にどのようなことなのだろうか。野球の試合で審判がストライクを出す場面を想定してみよう。まずは、ピッチャーの指からキャッチャーのグローブに至るボールの軌道は、物理的な性質が存在する。このとき、ボールの軌道という物理的な事実（性質）それ自体では、ストライクかボールかという野球的な事実を決定することはできない。審判がこの軌道を追い、ストライクかボールかの判断を行うことで、ストライクであることが決まるのである。つまり、ストライクである (*being a strike*) という性質は、基礎的な性質であるボールの軌道に基づき、審判の判断によって授与されているのである。このとき、ストライクであるという野球の性質について、授与主義的説明では以下の5つの側面が存在していると整理できる。

授与される性質：どのような性質が授与されるか（e.g. ストライクであること、ボールであること）

誰が：誰が〔判断〕主体なのか？（e.g. 審判）

何が：主体のどのような態度、状態、行動が重要なのか（e.g. 審判の判断）

いつ：どのような条件下で授与が起こるのか。（e.g. 野球の試合という文脈内で）

基礎的性質：主体は（意識的であれ無意識であれ）何を追おうと試みるのか（e.g. ボールの物理的軌道）

（p.8 より一部修正）

さまざまな社会的性質は、ストライクやボールと同じように、私たちの基礎的性質に基づき、特定の文脈内で、他の人々の態度や実践によって与えられ維持されるのである。社会的性質が他の人々によって与えられるという点は、サークルの構築的説明などからアスタを区別する。

さらに、社会的性質においては、制度的な性質と共同的な性質を区別することができる。授与主義的枠組みはこのどちらの性質も取り扱うことができる。

制度的性質は、制度的構造に位置付けられることで可能となる性質である。教授、生徒、市民、賃借人などは、制度的構造のなかで可能となるような性質であり、社会制度などの権威に根拠をもっている。他方で、制度的構造に位置付けられているということだけでは説明できないような性質も存在している。有名なサッカー選手やカッコいい人といったものは、制度的には説明ができない。人種やジェンダーといった気がつけば自分が投げ込まれているような社会的性質も制度的な説明が難しい。制度的性質には当てはまらない社会的性質は、共同的性質であると考えられる。

制度的性質は制度に根拠をもっていたが、では、共同的性質の根拠をどのように考えるべきであろうか。共同的性質の例として、とある高校における人気な生徒を考えてみよう。人気な生徒は、人気者であることゆえの制限があるかもしれないが、基本的にはクールとみなされ、他の生徒には許されない好きな着こなしができるなどの特権も持ち合わせている。アスタによれば、このときに授与される「人気である (*being popular*)」という社会的性質は、集団的に、他の人々によって授与される。重要であるのは、社会的性質を授与する人々は、社会的地位を授与できるだけの十分な地位 (*standing*) を保持しているというこ

とである。つまり、制度的性質は社会制度などの権威に根拠があったが、共同的性質は社会的地位を授与する人々の地位に根拠があるのである。

第二章

第二章でアスタは、社会的カテゴリーに関する「社会的重要性としての社会的構成 (*social construction as social significance*)」を提唱する。何か特定の文脈で社会的重要性をもつことはとは、特定の文脈において社会的な役割を果たすことや社会的意味を有していることを意味している (p.47)。アスタのここでの目的は、社会構成主義の主張をサポートできる一般的な形而上学的枠組みを提唱することである (p. 35)。

人文学や社会科学が「何か社会的に構成されている」というとき、それはどのようなことを意味して、どのような帰結を引き出そうとしているのだろうか。アスタによれば、ハスランガーが議論したように、社会構成主義の重要な目的は「正体を暴く (debunk)」ことにある (p. 36)。つまり、圧政的な制度や実践を正当化する機能を果たしており、広く信じられている信念の正体を明らかにすることに力点がある。

その上で、アスタは「社会的重要性としての社会的構成」について述べる前に、まずは、社会的構成においては二つの形式を検討する。因果的構成と構築的構成である。因果的構成は、「物事はそれ自体で構成されている」という、よりラディカルな社会的構成を主張している。例えば、「障害は社会的に構成されている (*disability is socially constructed*)」という主張を検討してみよう。車いすユーザーにとって十分に整備されている環境下では、車いすユーザーは自由に動き回ることができる。しかし、エレベーターがない建物では、必要な階に行けないかもしれない。後者の文脈では、物理的環境が与えられることで、特定の身体的特徴が車いすユーザーであるという結果がもたらされている。障害は物理的・社会的環境によって因果的に引き起こされているのである。

他方の構築的構成を最初に提唱したのは、サリー・ハスランガーである。ハスランガーによると、「定義に際して社会的要素に言及しなくてはならないときかつそのときに限り、あるものは構築的に構成されている」(Haslanger 2012;

p.87)。材料を特定の方法で配置することで物質が構築されているように、社会的現象も、物理的・社会的現象を特定の方法で配置することで構築されている。ハスランガーはこのような社会構成主義の議論を人種やジェンダーを中心として行うが、アスタの社会的構成は社会的カテゴリーに注目し、ハスランガーの構築的構成の代わりとなるように提唱されている (p.42)。

アスタによる特徴Fの一般的な社会的構成は以下のようになる。すなわち、「特徴Bの社会的な重要性として、特徴Fは社会的に構成される。これはFを授与するための基礎を提供する」(p.44)のである。また、社会的に構成されている特徴Fは、ある社会的地位を与えることがある。しかしながら、このメカニズムはハスランガーと異なる。ハスランガーは人種やジェンダーの構築的構成においてヒエラルキーを重視したが、アスタは「特定の文脈内でBという特徴が社会的重要性を保持していることによって、Bをもつ人々に他のFという特徴が授与される」(p.44)と考える。このときFは社会的に構成された特徴である。例えば、身体的な障害 (impairment) は、特定の文脈において、身体的障害がもたらすもの以上の制約や可能性を授与されるかもしれない。身体的には運転が可能であるのに、法律で禁止されている場合などが当てはまるであろう。

以上のような説明は、社会的カテゴリーについても適用可能である。すなわち、私たちの社会的カテゴリーは、他の人によって授与される社会的性質や特徴によって、社会的に構成されているのである。他の人々の実践などに私たちのカテゴリーは影響されている。アスタの「社会的重要性としての社会的構成」は、社会的カテゴリーに関するこのような直感を説明する。

コメント

アスタの授与主義的枠組みは、社会に生きる私たちにとって、社会的カテゴリーや社会的性質がときにままたまならず、ときに心強い味方であることをうまく説明してくれる。生まれたときにはすでに投げ入れられており、自分ではどうにもならない性質もあれば、社会的制度を利用し自分が望む社会的性質を手に入れられることもある。

さらに、アスタの枠組みは社会的カテゴリーにおける個人の経験を説明するだけではなく、人種やジェンダーなどといった論争的なカテゴリーについても形而上学的な知見を提供している。要約では省略したものの、この点は特に第三章・第四章で詳しく述べられている。フェミニズムにとって、生物学的性とジェンダーの関係性は常に重要な論点であった。ボーヴォワールが提唱し、バトラーにまで引き継がれてきた本論争に、アスタは新しい知見を付け加える。アスタによれば、生物学的性とジェンダーの双方を社会的カテゴリーと考えることができる。生物学性も出生時に法律によって登録されるという意味で制度的性質であり、ジェンダーは他の人によって授与されるという点で共同的性質である。

この説明はジェンダーや人種以外の社会的カテゴリーにも敷衍することが可能である。特に、これまでに生物学的カテゴリーだと思われていたカテゴリーを、社会的カテゴリーとして説明する可能性が開かれている点は重要である。たとえば、ダウン症のように生物学的だと思われているカテゴリーも、診断に基づく社会的カテゴリーだとの解釈が可能になる。

他方で、社会的カテゴリーを無闇に広げることに注意が必要であり、どこまでを社会的カテゴリーと認めるのかは、アスタの説明が十分でないように思われる点である。アスタはあらゆるカテゴリーが社会的であると主張しているわけではなく、赤い髪のような自然的カテゴリーの存在も認めている。アスタによれば、社会的な性質によって定義されるものが社会的カテゴリーであり、生物学的性質によって定義されるものが自然的カテゴリーである。しかしながら、自然的性質と社会的性質はどのように区別したら良いのであろうか。生物学的性を制度的性質に数え入れてしまったことで、これまでは同じ自然的カテゴリーに含まれていた赤い髪と生物学的性をどのように区別するのが曖昧になってしまったように感じられる。アスタは身体障害などを社会的カテゴリーの例に出しているが、身体的性質が重要視されるカテゴリーを検討するにあたっては、さらなる議論が必要であろう。

本書の哲学的意義を評するにあたって、本理論が形而上学、社会哲学、社会存在論、フェミニスト理論など交差する位置に存在していることにも触れてお

きたい。なかでもアスタの専門であるフェミニスト分析形而上学の知見が生かされており、社会的カテゴリーという複雑な現象に一定の方向性を与えることに成功している。

さらなる検討が必要である点を考慮に入れても、私たちが常に直面し続けるカテゴリーの問題に対して、アスタの議論は社会的カテゴリーの創造と維持に関する新しい視点を提供してくれる。ジェンダーや人種、障害などといった複雑な現象は、単一の分野による検討や、単一の理論だけで説明できるようなものではない。アスタのように交差的・基礎的な研究を行うことで、私たちが生きているカテゴリーについて考えることができるのではないのだろうか。